
運命に選ばれすぎた男

めがっさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命に選ばれすぎた男

【Nコード】

N9119A

【作者名】

めがっさ

【あらすじ】

今思えば、あれがはじまりだったのだろう。俺の中では、もう少し後の出来事が起因しているようにも思えるが……

プロローグ

今思えば、あれがはじまりだったのだろう。

俺の中では、もう少し後の出来事が起因しているようにも思えるが……

四月。

俺は駅から学校への道を走っていた。

何故かと言うと、乗った電車が快速だったと言う、わかりやすい間違いをしたからなのだが。

「わわわわわわーあ！」

「うおお？」

突然の少女の悲鳴じみた声。それはドンドン近づいてくる。キキキと言う、ブレーキ音と共に。

発生源は向かって右手の上り坂。向うにとっては、下り坂になる道だ。

気付くのが遅かった。

俺と自転車少女は、ほぼ正面衝突の形で、路上に崩れ落ちた。

先に起き上がったのは女の方。髪形はボニーテール。釣り上がった細い目をした、気の強そうな女だ。

「ああー、傷ついたじゃん。入学祝いで買ってもらったばっかなのに」

人より先にMTBの心配かよ。確かに、高そうな自転車ではあるが。

「あたつ。ひざもすりむいちゃったじゃん。最っ悪」

次、自分かよ。

「あのな、ぶつかった相手に詫びの一つも無しかよ」

「詫び？ なんでよ。あなたがトロっとっ立ってるから、ぶつかったんじゃないか」

「そっちがハンドルきるか、ブレーキかければ、そもそもぶつかってないだろ」

「何よ。無傷のクセして。あたしなんか、ひざすりむいたし、ほら左手の袖だって破けちゃってるし」

「あのな、こっちだって出血はしてないけど、痛いもんは痛いんだよ」

「そんなもん、すぐ無くなるわよ。だいたいこっちは、あなたの相手をしてる時間なんて……」

「時間だったら、こっちだって……」

時間？

ちようど、俺がそれを思い出すのと同じ、学校からチャイムの音が聞こえてきた。

「ち、遅刻ー！」

あの女、一人で自転車乗って先に行きやがった。後ろに乗せてけ。言い忘れてたが、今日はこれから入学式だったりする。

校門をくぐり、中庭へ。昇降口で、自転車を置くのに手間取ってたらしいさっきの女にあった。が、ここでまた時間を食う気はお互いに無い。

入学案内と一緒に送られてきたプリントで、クラスの教室を確認する。

「一組……」「一組……」

……え？

結論から言うと、入学式に遅刻した。

彼女の名前は巽心愛。たつみこあ

あの坂の上にある巽神社に住んできると言っていた。

このあたりで一番大きな神社で、俺も小学校くらいまでは、初詣や夏祭りなどで、親に連れて行かれた事がある。

どうでもいい事だが、教室では出席番号が同じで、隣の席だった。

今思えば、これがはじまりだったのだろう。
少なくとも、彼女の中では。

第一章

春。

俺は無事、ねこちぐら高校の一年一組に在籍する事と相成った。

まあ、進学校やスポーツ名門校ならともかく、近所の公立校など落ちろと言う方が難しいかも知れないが。ともかく、これでしばらく受験勉強ともおさらば出来る。本気のヤツは、とくに大学受験の準備を始めているのだろうが。

「ありづか中から来ました、高畑陽平たかはたようへいです。中学の時は野球部に入っていました」

そんな無難な自己紹介をして、再び席につく。他のみんなも同様に自己紹介をしていくが、はつきり言って半分も覚えられる自身は無い。当たり前だ。たった五十分の制限時間で、二十八人もの顔と名前とプロフィールを覚えられるわけがない。

今の自己紹介の通り、俺は野球が好きだ。得意なんじゃない、好きなのだ。得意だったら、野球推薦もらえて、受験地獄を回避できた事だろう。

それでも、俺は高校でも野球部に入部する事にした。

このねこちぐら高の野球部も、そんな俺が入部するような部だ。ろくな成績は残していない。その分練習もきつくないので居心地は悪くない。……多分、だから上達しないんだろう。

俺以外にも仮入部の一年が何人か来ていたが、みな実力は俺とどっこいどっこいだ。二年や三年の先輩も、たいして実力差は無いように見えた。

高校生活初日の今日は簡単な捕球練習だけだ。適当なところで切り上げて、家に帰る事にした。

ちょっと寄り道して、コンビニや本屋の場所でも見ていくかと、少し回り道して駅に向かっていると、不意に声をかけられた。

振り返った先にいたのは、ねこちぐら高校の制服の女子。リボンの色から同じ一年だとわかるが、誰だ？　なんか、見た事ある顔だ
が。

「あの、高畑君だよな？　ありづか中学の野球部にいた、背番号二十八番の」

「そうだけど……」

言うのは二度目だが、俺は中学時代これと言った成績は残していない。出身中学だけならともかく、背番号まで覚えられてるなど夢にも思っていなかった。それ以前にこの子、誰だろう。

その俺の視線の意味に気づき、少女が名乗った。

「あ、ごめんね。雨宮^{あまみや}美奈子^{みなこ}。同じクラスになったんだけど、まだ話してもいないもんね」

そうか、それで顔を覚えていたのか。

何の用だろうか。

「あの、少しだけ時間借りていいかな？　すぐに終わるから」

「別に構わないけど」

立ち話もなんなので、近くの公園に移動する。

敷地をジョギングコースがぐるりと囲っている小さな自然公園だ。その道を走るじいさんや犬の散歩をさせるおばさん等、近所の人の憩いの場所になっている。部活が本格的に始まれば、俺も毎日ここにランニングに来るだろう。

空いてるベンチを見つけ、二人並んで腰かけた。

それから五分ほど、沈黙。

何か話があるから呼び止めたのだろうが、雨宮さんはうつむいたまま喋ろうとしない。話をどう切り出すか迷っているのだろうか。

キマズイ。

とにかく、この沈黙だけでも打破しないと。

「喉、渴いてない？　さっき自販機あったけど、何か買って来ようか」

「いい」

…… 会話終了。

よく考えれば、中学時代は（成績不振とは言え）野球に明け暮れる毎日だったせいで、女の子と付き合うどころか、ろくに口を聞いた記憶もほとんどない。女子マネージャーもいるにはいたが、いつの間にか他の部員とくつついて、そいつともども退部していった。ム力つく思い出なので、今後の生涯でこの記憶を呼び覚ます事の無いように務めたい。

あ、野球部といえば、

「雨宮さん、俺の中学の時の背番号まで知ってたよね？　もしかして、その事かな？」

「え、う、うん。そう」

やっと雨宮さんが口を開いてくれた。

「高畑君、今日野球部に仮入部に行ってたみたいだけど、高校でも野球するの？」

「まあ、そのつもりだけど」

「そうか……よかった」

何が？

「あのね、あたしも中学の時野球部だったんだ。マネージャーですばこ中学。覚えてるかな？　去年の地区大会の一回戦であり中と当たったんだけど」

もちろん覚えてる。

その試合、俺の送りバントが成功して、一点とる事が出来た。その一点を護りきって、二回戦の進出を決めた。二回戦では、一点も取れずに負けたが。

ちなみに、中学三年を通し、公式戦で勝ったのはその一試合だけだ。我ながら、情け無い。

「あたし、その試合でバッターボックスに立つ高畑君を見てね、その……一目惚れ……しちゃってたんだ」

え？

今、なんて言いました？

一目惚れ？

全然知らない人なのに、顔とか仕草とか物腰とかを見ただけで、その人を好きになるって言う、あれですか？

「あの時は、お互い対戦校同士だったし。いきなり話し掛けても、困らせるだけだと思って諦めてただけけど……びっくりしちゃった、高校で同じクラスになっちゃうんだもん」

いつの間にか、雨宮さんの手は俺の手を握っている。さっきとうってかわって饒舌になったが、緊張してるのか少し汗ばんでいる。

「あたし高畑君が好きなの。去年の試合から半年間ずっと見て来たけど、この気持ちが薄れた事は一度もなかった。もし迷惑じゃなかったら……あたしを、恋人にしてください」

マジ告白だ。

生まれてから十五年。こんなシーンはテレビか映画の中にしか存在しない物だと思っていた。ましてや自分が主演になるとは夢にも……いや、夢には思っていたが。

彼女は言うべき事は全て言い尽くしたのだろう。赤く染まった頬と、潤む瞳でまっすぐに俺を見つめている。

何を迷う事がある。応えろ、俺。

彼女はただ試合で見かけただけの俺を半年もの間想い続けて来てくれてたんだぞ。半年間、見続けて来てくれてたんだぞ。……どこで？

「えっと、学校の帰りとか、コンビニで買い物してる時とか、ゲーセンで友達と対戦してるところとか、駅の裏通りの小さい本屋で雑誌買ってるところとか……あ、安心して、そう言う男の子の生理的な部分には理解あるつもりだから……あと、夜受験勉強する時に力ーテンに映る影を二、三時間眺めてた事もあったかな。あの、でも誤解しないでね、あたしストーリーカーとかそう言うのじゃ……」

百パーセント、ストーリーカーの行動です。

「あの、あたしの事嫌いになった？もしそうなら遠慮なく言って付き合えないならそれでも良いの。また、今まで通りに戻るだけだ

から」

ストーカー行為をやめる気ナシですか。
でも。

改めて、雨宮さんを見てみる。

透き通るような白い肌。ツリ目勝ちの大きな目と小さい鼻とピンクの唇。肩の後ろまで伸びた綺麗な髪が、その魅力を最大限に引き出している。

顔だけ見ても、十分美人だ。

制服越しだが、スタイルだって悪くない。

そんな子に告白されて、断ると言う選択肢を選ぶヤツがいたとすれば、そいつはホモか大馬鹿野郎のどっちかだ。例え相手がストーカーだろうと。

もちろん、俺は首を縦に振った。

「断られたらどうしようかと不安だったけど、思い切って告白してよかったわ。ね、明日お弁当作って来てもいいかな？ 高畑君の好きなカラ揚げとエビフライ、いっぱい持ってくるから。もちろん塩が多めのしょっぱいタマゴ焼きもね。あと学食前の自販機にはレモンティー売ってなかったから、それも家から持って行くね」

……どこまで把握されてるんだろう。

だが、雨宮さんが美人なのは客観的に見た事実。

翌日の昼休み、クラス中の男子の羨望のまなざしの中でランチタイムを送った事は言うまでもない。

俺と雨宮さんが付き合う事になってから、早くも二週間が経っていた。

俺は予定通り野球部に入部し、雨宮さんもマネージャーとなった。今は朝練と称したキャッチボールが終わったところだ。思った通り、又ルイ部だった。

「お疲れさま。はいタオル、汗拭いて。それとスポーツ飲料、汗をかいた分水分を補給しないとね」

「ありがとう」

このように専属マネージャー状態で、かいがいしく世話してくれる。

他の部員も道具を適当に片づけて、戻って来た。

「なあ、俺達にもタオルとってくれよ」

「そこに置いてますから、ご自由にどうぞ」

「……スポーツ飲料」

「あつちに自販機ありますよ」

他の部員（特に先輩方）の刺さるような視線が痛い。雨宮さん、頼むから他の部員にも愛想よく接してください。でないと俺の部活での立場と言うか、風当たりと言うかが。

そして二人で教室に行く。

着替えがあるから先に行ってて良いと言ってるのだが、雨宮さんはいつも律義に待っていてくれる。そのおかげか、いつも俺の着替えが一番早い。他の部員の無言のプレッシャーから早く逃げたいと言うのもあるが。

教室では最初の内こそ冷やかされたが、「人の事をどうこう言う暇があったら、あなた達も恋人つくれば？」と言う、雨宮さんの逆襲にあい、今では何も言われなくなった。言葉の正当性よりも、あの時のドスの効いた低い声の方が効いたのだろうが。

あんな声も出せるんだ、俺も気をつけよう。

昼休みは雨宮さんの作ってきてくれたお弁当で、ランチタイム。メニューは俺の好物が並び、さらに栄養バランスも取れた完璧な物だ。しかもレトルトや冷凍食品でないうえ、二日続けて同じおかずが入っていた事もない。何時に起きて作ってんだろう。

ついでに、昼食をとりながら午前の授業の復習もする。ほとんど

は俺のわからないところを教えて貰う形になるのだが。思えば中学時代は、授業以外で教科書やノートを開くのは試験の前夜だけだった。たった二十分の復習だけで授業の理解度が格段に上がるのは、新しい発見だった。

で、放課後はまた、二人で部活だ。

今日は雨宮さんが職員室に用があるとかで、遅れてくるそうだが別に彼女が何か問題を起こしたわけじゃない。ただ、委員長を決める時誰も立候補しなかったので、出席番号一番の男女が強制的に任命されただけだ。自主性の無いクラスだ。

ノートやら教科書やらをカバンに押し込んでる時に、不意に声をかけられた。

黒い肌と短い髪のデカイ男。たしか近藤晶こうどうあきらといったか。

出身中学も違うし、野球部でもない。何の接点もない相手だが。

「お前、雨宮美奈子と付き合っていると聞いたが、本当か？」

「あ、ああ……」

近藤の質問に、間抜けな返事をしてしまう俺。だって、今さらだろ。毎日、一緒に登下校してるんだぞ。とつくに公認になってると思ってた。

俺たちの会話を傍目で聞いてた級友の表情が、その認識が俺の自惚れじゃ無い事を肯定してくれている。

「だったら、何なんだよ？」

さっきの間抜けたセリフを払拭するために、少し挑戦的に返した。もしかしたら、こいつは雨宮さんを狙っていたのかもしれない。あの通りの美人だし、つきあってみてわかったが気立てもいい。

きっと彼の中では、まずは話せるくらいの中になって、何人かのグループで遊びに行くようになって、最終的に二人で過ごす時間を重視する仲になる。と言った感じの長期的なプランが組み立てられていたのだろう。そのプランがスタートする前に、俺がいきなり現れたんだ。小言の一つも言いたくなるってもんだらう。

人間と言うのは恋人が出来ると、信じられないくらいに心が広くなる生き物らしい。俺は近藤の気がすむまで小言に付き合ってた。と、椅子に座り直した。

だが、続く彼のセリフは俺の想像とは、まったく真逆の内容だった。

「別にこの世界の誰と誰が付き合おうと、俺には関係ないさ。だが、あの女は別だ。いや、あの女とお前がくつつくのだけは、断固反対する」

やけに真剣な眼差しで、

「おまえが誰かにとられるのだけは、阻止したいんだ」

と、そう言い残し教室を出て行った。

どう言う意味ですか？

「近藤君、何の話だったの？」

近藤が行ったのと入れ違いで、雨宮さんが職員室から戻ってきた。頬を膨らませて少し不機嫌そうだった。さっきの会話、聞いてたんだろうなあ。

周りを見ると、他の生徒が俺を見てクスクス笑っている。

さっきの近藤のセリフ……そう言う意味ですか？

もうすぐ五月になるというのに、まだ風が冷たい。それに五時をちよつと過ぎただけで、あたりはもう真つ暗になる。

「つくし」

雨宮さんの可愛いクシャミ。この時期は、日が暮れると一気に冷える。学校指定の薄いカーディガンじゃ、防寒の役には立たないだろう。ここで上着をかけてあげるのが彼氏の勤めなのだろうが、あいにく上にはセーターしか着ていない。寒さに強い自分が恨めしい。

「高畑君もカゼには気をつけてね。もうすぐレギュラー選抜も始ま

るし」

「うん、俺は大丈夫だよ」

こんな時でも、俺の体を気遣ってくれる。風の冷たさで赤く染まる頬が可愛い。

そうだよ。これが青春とかいうんだよな。

弱小野球部とはいえ、レギュラーになれば活躍のチャンスもあるう。彼女の期待に応えたい。

よく考えたら、この二週間、彼女に世話になるばかりで、俺から何かをしてあげた記憶がない。レギュラー獲得が、最初のそれになるはずだ。

踏切りにさしかかる。

俺はここから駅に行き電車、彼女は踏切りを渡って二十分ほどの住宅街に住んでいると聞いた。今日はここでお別れだ。

「じゃ、また……」と言い終わる前に、彼女が腕にしがみついていた。「待つて。あたしから離れないで」と言うセリフと共に。

入学初日の告白と良い、顔に似合わず大胆な子だ。今回は少し事情が違うが。

踏切りの向うからコート姿の大男が歩いて来ているからだ。さらに帽子を深く被り、大きなマスクで顔も隠されている。

別に見ただけで人を判断するつもりは無い。

寒いんだからコートを着てもおかしくない。マスクだって、カゼのひきやすい時期だし、花粉症だって敏感な人なら症状が出始める頃だ。そう、向うから歩いてくる人は、決して不審な人物ではない。

それでも雨宮さんの両腕は、俺の左腕にしがみついて離れない。時間も時間だし、彼女は女の子だ。不安な気持ちもわかる。男が通り過ぎるまでの間、こうしていればいいだけだ。

だが、男は通り過ぎはしなかった。

長いコートの袖からチラリと見える光。それを、俺達に向けて突きたてて来た。

「高畑君！」

雨宮さんに腕を力いっぱい引つ張られ、バランスを崩し、斜めに倒れかける俺。一瞬前まで、俺の胸のあった位置に、男の腕が突き刺さる。

さつき見えた光の正体は、ナイフの刃の反射光だ。

とつさの雨宮さんの機転がなければ、あれが俺の……

「こつち！」

「うわわ！」

考えてる暇などない。

男が再び、ナイフを構え追いかけてくる。

何で？

何でだよ！

わかつてる、考えてる暇は無い。

今は考えるより、逃げるのが先だ。

俺は雨宮さんに導かれるままに、住宅街を右に左に駆け抜ける。

「こつち」

案内された先は、一軒の家屋。表札には、雨宮と書かれている。

雨宮さんの家か。

素早くカギを取り出し、ドアを開けると中に入るように促す。そして、俺が入ったらすぐ、再びドアに施錠した。

「これで、多分大丈夫。どこか行くまで、ここに居ていいから」

「あ、ああ……」

男を振り切つて、少し頭が落ち着いてきた。

あの男は何者なんだ？

なんで急に切りつけてきた？

誰かに殺されるほどの恨みを買った覚えは無い。

最近は怨恨など関係なく、障害事件や殺人事件が起こる世の中だが、二十分も追いかけてくるものか？

それに、もう一つ気になる事がある。

雨宮さんの行動だ。

踏切りのところで腕にしがみついていた時は、単純に見た目に恐怖を感じてただけだと思ってたが、襲われてからここまで逃げてるまでの判断、あらかじめ男が襲ってくる事を知ってたかのように的確だった。

その疑問を雨宮さんに投げかける。

「そうだね。向うが行動に出てきた以上、高畑君にも話しておいた方がいいわね。もう少し時間を起きたかったんだけど」

やはり、何か裏があるのか。

「その前に上がって。長い話になるから
それも、かなり深い裏が。」

リビングに通された。

「ごめんね。部屋は散らかってるから」

との事だが、女の子の言う散らかってるだ。多分、俺が一日がかりで大掃除した後くらいにしか、物が散乱してないだろう。多分、男を部屋に入れるのに抵抗があるだけだ。別に何かを期待しているわけじゃ……ないが。

それに他人の家と言うのは、どの部屋であつても居心地はあまりよくない。

ほどなくして雨宮さんが、キッチンから二人分のお茶とケーキを持って来てくれた。

「食べながらでいいから聞いてね」

テーブルにつくと、本人はお茶にもケーキにも手をつけず、話し始めた。

「まず、さっきのコートの男の事。ヤツは高畑君の命を狙っている。どこの勢力から送られてきた者かはわからないけど、それだけは確実」

衝撃の事実から雨宮さんの告白は始まった。

「あなたはあたし達にとって、とても大切な人。一万年の時を経てようやく見つけられた、あの方の血を受け継ぐ者」

「今、一万年って言った？」

「聞いて」

質問は今までに見た事のない真剣な顔により、却下された。

「あたし達があなたを見つけたのとほぼ同時期に、あなたの存在をよく思わない敵対勢力も、あなたを見つけ出した。そして、あたしと接触したのを知り、慌てたのね。突然強行的な手段に出た。それが、さっきのコートの男」

「えっと……言ってる意味がよくわからないんだけど」

「今重要なのは、あの男があなたを殺そうとしているという事。なぜなら……」

がしゃあんと大きな音を立て、小さな庭に面したガラス窓が砕けて飛んできた。

庭には、さっきのコートの男が立っている。

カギのかかったドアからの侵入は不可能と判断して、こっちに回り込んできたという事か。

さっきの雨宮さんの話、少なくとも男の狙いが俺だということは間違いなさそうだ。結局、男が俺を狙う理由は聞けず終いだが。

男がナイフを持ち直し、また俺に向かって突きたてて来た。

「避けて！」

雨宮さんの体当たりで、俺の体が床を転がる。

顔を上げると、俺に刺さる予定だった白刃が、雨宮さんの肩を掠めていた。

「あ、雨宮さん！」

「大丈夫、地上の刃物じゃあたしは切れない」

こんな時に何を言って……

「あなたは、そのまま伏せてて」

男に向かって一歩前が出る。

「去れば見過ごそうと思っていただけ、考えが甘かったみたいね。あの方の子孫に仇なす者と認識した。あなたを排除する」

広げかざした雨宮さんの右手から光が生まれ、棒状へと変化して

いく。瞬きする間もないうちに、その光は剣の形になっていた。

それを一閃！

ナイフを持つ男の腕がフローリングの床に落ちる。

「生き物じゃなかったの。なら、倒すのに躊躇無し」

雨宮さんの言葉を肯定するように、切り落とされた男の手の切り口からは、赤い血が流れる代わりにオレンジ色の火花が飛び散っている。

床を蹴り一気に男との距離を詰める雨宮さん。今度は、光の剣を横に薙ぐ。

男の体は腰のあたりで切断され、下半身を残したまま、地に崩れた。

それを確認した雨宮さんは、俺の方に振り返る。

「怪我は無い？」

「俺は、大丈夫だけど」

こいつは結局何者なんだ。

動かなくなった、立ち尽くす下半身。手と同じように、火花を飛び散らせている。

ロボットなのか？

好奇心から、上半身の方に近付く。

帽子とマスクとコートの襟に隠された顔。どんな顔なのか興味ある。人間と変わらない容姿なのか、目の部分がカメラのレンズだったり、それともパイプやチューブが伸びたメカメカしい物なのか。

露わになったソレは、俺の予想のどれからも外れていた。

「……銃？」

その表現が一番適当だろう。

黒光りする金属の筒と、それを支える重厚な金属の箱。その箱には、弾丸を備えた短く太い筒がはまっている。たしかリボルバー型とかいうタイプの銃だ。

いや、銃と言うよりもはや大砲とでも言うべきか。砲身の太さは、俺の二の腕くらいある。

それが首から生えている。

「いけない。逃げてー！」

「え？」

しまった。あまりにも意外な物の出現にほうけていたが、その銃の口は俺に向いている。こいつの目的が俺を殺す事だと言うなら、この先に起こる事は火を見るより明らか。

ム力つくその予感通り、シリンダーが時計回りに回転を始めた。パン、パン、パン、パン、パン、パン。

運動会のスターターピストルとほとんど変わらない、乾いた銃声が正確な間隔で六度。割れたガラスと壊れたテーブルセットに埋め尽くされたリビングに、硝煙の臭いが充満する。

ただ、それだけ。

俺は無傷だ。

「こいつは地下帝国でもポピュラーな暗殺機、動力が三段階に分かれていて、二つや三つに切り分けた程度じゃ、その機能を停止しない」

目の前にはなぜか、近藤晶が立っていた。両手に三発ずつ、計六発の歪んだ銃弾を握った姿で。

リビングはさっきの乱闘でボロボロになってしまったので、隣の和室に移動させてもらった。

コート姿のロボット……近藤が言うところの暗殺機……は、あの後さらに雨宮さんの手によって二十以上の鉄屑へとばらされている。もう動かないだろう。

ちやぶ台の端と端で、雨宮さんと近藤が冷たい視線を飛ばしあっている。

「体を張って、魔王様の命を護ろうとしていた事には感謝する。いくつも手抜きはあったがな」

「何言ってるの。この方は勇者様よ。だいたいにして、命を狙ってきたのは、あなたの差し金じゃないのかしら？」

「暗殺機は我が家の復興を阻止する者の放った物だ。俺は関与していない」

「フン。口ではなんとでも言えるわね」

……話がまったく見えてこない。

何か重要な話をしてるようにも聞こえるし、ゲームの攻略法を教えあつてるようにも聞こえる。

俺がぼさつとしてる間に、二人の会話はそれなりの決着がついたようで、近藤が立ち上がる。

「これ以上話してもラチがあかないな。見たいテレビもあるんでね」「そうね。まだ覚醒していない以上、どちらを選ぶかまだわからない。あなたへ小言を言う時間も今後取れるでしょう」

「しかし……天上界の天使様とあるう者が、色仕掛けなんてセコイ手を使うとは思ひもなかったぜ」

「そちらこそ、さすが土の下に住むモグラさんだけあつて、策を弄するほどまでには知能が発達していないようね」

そのセリフを背中で聞きながら、近藤は割れたリビングの窓から出て行った。

結局、俺は最後まで蚊帳の外だった。

第二章

「あなたはかつて天上界の危機を救った勇者、スクウア様の子孫なの」

翌朝、登校時の雨宮さんとの会話は、そのフレーズから始まった。帰りに別れる踏切りのところで会えばいいのだが、彼女はいつも律義に改札の前まで引き返して待っていてくれる。

学校までの十五分ほどの道のり。いつもは昨日見たテレビや、野球部の事、クラスメイトの話題などをして過ごす時間だが。

今日は、どうしても昨日の出来事を、確認しておく必要があった。のだが……

「およそ、一万二千年前の事。天上界は荒廃していた。邪皇竜コア・スア・クデイスと呼ばれるドラゴン……いや悪魔に蹂躪されて。その暴挙は百年以上にも渡り、天上界の住人もはや対抗する術を持たず、天上界と共に滅びの道を進むしかないと思っていた。しかし、そこに現れた希望の光……スクウア。後に勇者と呼ばれる青年の尽力により、竜は倒され、天上界に平和が戻った。ただし、その平和な世界に、スクウアの姿は無かった。竜と相打ちになったとも、神の使いであった彼は役目を果たし天界に帰ったとも、彼自身も竜の一部であったとも、いろいろな説が囁かれたけど、どれも決め手にかけた。それから二千年後、一人の学者によってスクウアが地上に降りたという痕跡が発見された。それから一万年の時をかけて、あたし達はスクウアを、その血統を受け継ぐ者を探し続けた」

雨宮さんが、やっと一呼吸起き、俺に向き直る。

「それがあなた。あたしはなんとしても、あなたを天上界に連れて帰らねばならない」

どうしよう、ついていけない。いきなりこんな話をされたら、大多数の人はそう言う感想を持つだろう。

だが、いきなりじゃ無いんだよな。

昨日現れた、頭が巨大拳銃になってるロボット。そして、雨宮さんが手にしていた光の剣。その記憶が、この雨宮さんの話の信憑性を後押ししている。少し引つ掛かる部分もあるけど、本当の話なんだろう。

なら、もう一人、話を聞いておかなきゃならない相手がいる。

そいつと話す時間が取れたのは、昼休みになってからだった。

近藤晶。

昨日、銃弾を素手で受け止めるという、人間離れしたパフォーマンスを見せつけてくれた。

俺の事を魔王と呼んでいたか。

昨日の二人の様子からも、俺を勇者と呼ぶ雨宮さんとは、対立する関係にあるのは明らか。出来れば、彼女抜きで話を聞きたいところなんだけど。

「高畑君、お昼にしよう」と、いつものように、四時間目が終わってすぐ、俺の席に来てくれる。それ自体は嬉しいんだけど。

「用がある」と捲こうとしても「ついて行く」「手伝う」と、離れようとしてない。

結局、雨宮さんもつれて、三人で屋上に行く事になった。

教室を出る時、女子が「ついに直接対決?」「修羅場よ」などと言っていたが、聞こえなかった事にしよう。

「雨宮にも聞かれるのは不本意だが、まあいいだろう。すでに俺の目的は知ってるようだしな」

「当然」

相変わらずの険悪ムード。

近藤は構わずに話し始めた。

「俺はこの世界の下に存在する、地下帝国の人間だ。と言っても、物理的に地下何万メートルとか言う場所にあるわけじゃないが。そ

れは天上界がそのまま上空にあるわけじゃないのと同じだと思ってくれればいい」

同じも何も、天上界の住所なんか聞いてない。

「地下帝国は五千年前までは国と言う物が具体的には存在せず、何百と言う集落、部落、集団、賊……それらが各々好き勝手に生き暮らしていた。しかし、そんな状態ではグループ間の衝突など日常茶飯事。領地の境界を超えた、仲間が傷つけられた、食い物を横取りされた、川の水を飲ませてもらえなかった……些細な事での小競り合いが、他のグループを巻き込んだ戦争へと発展する事も少なくなかった。それに警鐘を鳴らし立ち上がったのが、後の世で魔王と呼ばれる男アングラモア。彼の圧倒的な力は、それまで地下帝国に点在していた何百と言う集落、部落、集団、賊……それらを全て飲み込み、一つの部族としてしまった。かくして、魔王アングラモアを中心とし、五千年を数える地下帝国の正史が始まった」

一気に喋って口の中が乾いたのか、一口お茶を飲むと、

「高畑。お前はそのアングラモア様の生まれ変わりなんだ」

俺に言った。

「えーと、つまり……」

俺なりに二人から聞かされた話を整理する。

「俺は勇者の子孫であり、なおかつ、勇者に倒された魔王の生まれ変わりだと」

「は？」「ん？」

あれ？　なんだ、二人のこの反応は。二人の話を総合すると、そう言う事になるだろう？

「勇者様が倒したのは邪皇竜、魔王じゃないわ。天上界の者が地底の者を倒す理由もないし」

「それにスクウアの時代は一万二千年前、アングラモア様の時代は五千年前。計算が合わないだろ」

「じゃあ、魔王って何だよ」

「それは、あれだ……うちで雇ってる翻訳家の誤訳だ。どうも、地

上界では魔と言う言葉に、良い意味は無いようだ。言い易いんでつい魔王と言ってしまうんだが、正しくは全能な王とか絶対的な王とか、そう呼べばいいか。今日の地下帝国の基礎を築いた、偉大な人だ」

なんとも紛らわしい。

「俺はアングラモアの五十八代目の子孫に当たり、簡単に言えば王子のような者だ。だが長い歴史の中でアングラモアの家名の力が徐々に衰えてきてな。家名復興のために、アングラモア様の生まれ変わりである、高畑の力を借りたかったんだ」

「それじゃあ、昨日襲ってきたロボットは、あなたの家の復興を阻止したい別の一族の差し金になるのかしら？」

「間違いない。我が家とは逆に、この五千年の間、密かに力を蓄えていた者もいるだろう。数までは把握できてないが、王家転覆のチャンスと見て、行動を始めたんだろう」

「迷惑な話だわね。勇者様の命を狙う不屈き者が、いくらともなくいるなんて」

「どうだ。物は相談だが、一時協力しないか？ 高畑の命を狙う我が家の敵対勢力を一掃するまで」

「むしの良すぎる話ね。要するに、あたしを地下帝国のお家騒動に巻き込もうって言うんでしょ……しかも、ただ働きで」

「だが、利害は一致してるはずだぜ。彼を護るという一点においてだが」

「……そうね、そこだけは一致する。地下帝国から護るために、地下帝国の者と手を組むというのも妙な話だけどね」

また、俺は完全に蚊帳の外だ。

俺が議題の中心にいるはずなのに。

そうだ。一つ気になる事がある。

いや、気になっていた事があった。

「なあ、二人とも、ちよつといいいか？」

「なに？」「なんだ？」

「もしかしたら、コレ、勇者か魔王に関係ある物なのか？」

右腕の袖をまくって二人に見せる。手首から肘にかけての部分に、まるで文字のように見える黒いあざがあるのだ。

いつからある物なのかはわからない。

ずっと幼い頃には無かったような記憶があるが、アルバムを開いても、あざのある部分は死角になってたり袖に隠れていたりで、見えるものは一つもなかった。

両親に尋ねてもわからず「どこかでぶつけたんじゃないか？」と言う返事しかもらえなかった。

だが、子供心にこれはただのあざじゃないと思っていた。そう思いたかった。漫画やアニメに登場する超人は、その超人的能力の証として、体の一部に不思議な模様や文様が浮き出ている者もいる。そうだったらいいなと、思っていたんだ。

成長と共に、その気持ちは徐々に薄れて行ったが、完全に消え去ってしまったわけじゃない。事実、今、俺の目の前には天上界人と地底人がいる。このあざのような物は、勇者の証とか、魔王の紋章とか、きつとそう言う物だったんだ。

なあ、そうなんだろ？ 雨宮さん。近藤。

「何、その汚いあざ」

「魔王様の体にあざがあつたという話は聞いていない」

……。

ただのあざだった。

あつという間に放課後。

今の俺は勇者の血も魔王の魂も目覚めておらず、能力的には人間そのものらしい。改めて言われなくても、十五年の人生で自覚している。

そこで、勇者の力が目覚めたら天上界へ、魔王の力が目覚めたら地下帝国へ連れて行く事に、いつの間にか二人で決定したらしい。

……連れて行かれる本人の意見は無視ですか？

とりあえず何かの力が目覚めるまでは、今まで通りの生活でいいらしい。

と言うわけで、放課後はグラウンドに出て、いつものように野球で汗を流す事にする。

ベンチには雨宮さんと一緒に、何故か近藤も座っている。

「いつ襲われるかわからんから、出来るだけ近くで護れるようにしたい」と言うのが、彼の弁なのだが。うちの部に男子マネージャーはいないので、浮きまくってる。

先輩達は、すでに同じクラスの部員から俺達の桃色の噂を聞いているらしく、いつもとは別の意味でよそよそしい。

今まで通りの生活をしていいって話は嘘ですか？

今日の練習内容は紅白戦。

レギュラー選抜も兼ねていて、周回毎にポジションを入れ替え、各人の能力を図る目的もあるらしい。普通、ポジション毎に選抜テストを行って振り分けるもんじゃないのか？ 小学生のリトルリーグでも、そうする。

俺の場合、一回がサード、二回がキャッチャー、三回の今はライトに立っている。体がついて行かない。

何度も言うが、我が校の野球部は弱小。

まず、外野まで長打できる選手などいやしない。暇だ。本気で退屈だ。まあ、ちょっとした休憩だと思っておこう。

ここからだと、グラウンド全体を見通せる。こうしてみると、各人の動きに結構クセがあって面白い。

あ、二年の先輩が一年の女子マネージャーをナンパしてる。あんな何しに野球部に……ああ、女漁りか。

その隣のベンチでは、雨宮さんが、俺のスポーツバッグの中身を

漁っている。タオルや予備の体操着を畳み直してるようだが、やめてほしい。

近藤の姿が見当たらないが。さすがに女子だけの中に一人にいる気まずさに負けて、どこかに移動したか。

「ライト、行ったぞー！」

不意に飛んでくる部長の声。

とと、試合に集中集中。ボールが飛んでこないのはわかりきって……今、なんて言った？ ぼてん、ぼてん、ころころ……

白球は俺の右横を通り過ぎ、黄土色の大地を後方へと直進して言った。誰だ、こんな長打を打ったのは。

ダイヤモンドに目を向けると、近藤が一塁ベースを蹴って、カーブする姿が見えた。制服のままで。お前も暇だったんだな。というか、この部アバウトすぎだ。

「つつ立つてんじゃねえ、ボールボール！」

再び飛んでくる、部長の怒号。

そうだ、ボールを返さない。

あわてて転がったボールを拾い振り返ると、近藤はすでに二塁を超えている。三塁に投げてても間に合わない。なら、バックホーム……そのつもりで、俺はショートにボールを任せた。

俺の右手を離れたボールは、二塁手の足元に落ち、数度バウンドした後、ピッチャーマウンドまで転がって行った。ピッチャーがそのボールを拾う頃には、近藤はすでにホームインしていた。ショートどこに行った！ ……さっき一年ナンパしてた先輩だった。あんた、持ち場離れすぎ。

「お前ら、試合中は気を引き締めろ！」
部長に怒られた。

たしかに俺がよそ見をしなければ、なんなくフライに出来た打球だったかもしれない。でも、何か釈然としない。

気を引き締めて試合再開。

近藤の次のバッターはあっさり三振して、今度はこっちの攻撃だ。

さっきの汚名返上のためにも、ヒットくらいは打ってやろう。

ちなみに現在の点差は一对〇で赤組がリードしている。つまり、近藤のランニングホームラン以外の点は入っていない。素人以下か、この部は。近藤はちょっと例外な部分があるが。

その近藤は、今度は借りたグロ・ブ片手にマウンドに立っていたりする。彼なら、一年レギュラー、四番でエースも可能だろう。

その彼の投球練習だけでも、目を見張る物があつた。

決意が早くも揺らぐ。あの玉に当てられるかな。

案の定、俺の前のバッターはあつさり三振にとられ、すぐに打順が回ってくる。

「高畑。お前が相手でも俺は手加減しないぞ。どんな勝負、どんな相手でも、負けるのは嫌いなんだ」

俺がバッターボックスに入るなり、近藤が高らかに宣言してきた。それを聞いてた部員達（特に女子マネージャー）がざわつき始める。こいつ天然だ。

そして、この身体能力も天然の物なのか。ただの直球なのに振り遅れてしまう。一五〇キロ以上出てるんじゃないだろうか。

ストライクコースなら見逃しより空振りの方が、自分を納得させられる。賢いやり方じゃないだろうが、俺は初球から打ちにいった。すでに二球目がキャッチャーミットに吸い込まれたわけだが。

残り一球。

球が速いなら、通常より早くバットを振ればいいだけ。球が速いなら、当たりさえすれば、その分高く上げられるはずだ。

近藤の手元を見据え、バットを握り直す。

「行くぜ。これで三ストライク、アウトだ！」

近藤が投球フォームに入る。そう言うって事は、今度もストライクド真ん中に来るか。

その予想はピタリと当たり、前二球と同じコースを進んでくる。作戦通り、早めにバットを振り下す。

ドンピシャリ。

バットが捕らえたボールは、そのまま跳ね返り、近藤の頭上を超えて飛んでいった。

非の打ち所のないホームランだ。

レフトも追う気など無いようで、ボールの落下予想地点までゆっくり歩いていく。

「高畑君、すごいじゃん。はいタオル、汗拭いて」

ホームに戻るすぐに雨宮さんがタオルを渡してくれた。

「ありがとう」

「それとスポーツ飲料、水分補給ね。自販機に新しいのが入ってたから試しに買ってみたんだけど、いつものやつの方が良かったかな」「うっん、これでいいよ」

渡されたジュースを一気に半分まで飲み干す。

正直、スポーツ飲料やアミノ酸飲料は、多少のすっぱいや甘い程度に違いしかわからないので、なんでも良い。それでも、雨宮さんに渡された物なら格別だ。

「雨宮ー！ 高畑にベタベタするな。色目を使うな」

「ベーっ」

マウンドから近藤が何か言ってきている。それを雨宮さんが舌を出して応戦する。

そのやりとりを……部員の反応はもういいや。諦めよう。

「おい、ボール落ちてこねーぞー」

レフトの声。

「そんなはず無いだろ。そっちの茂みに転がって行っただんじゃないのか？」

次にライトの声。

予備のボールくらいいくらでもあるが、部費の少ない弱小野球部。備品はできる限り使い続けたい。

試合をいったん中断して、ボール探しが始まった。明日明るくなつてから探せばいいんじゃないか、と言うのは禁句だ。

まだ六時前だというのに、すでに日が落ち月が昇っている。
都市の生活光に邪魔され星は見えない。まん丸の満月だけは夜空に鎮座している。

雲一つ無い漆黒の夜空に、赤く光る光の点が一つ。ゆっくり動いてる所を見ると、飛行機か何かか。まっすぐこちらに向かってきているが、そのまま通り過ぎるだろう。

そのまま通り過ぎるよね？

しかし、俺の予想に反し、その光は通り過ぎる事は無く、代わりに徐々に光度を増していく。大きく……つまり近くなって行く。

墜落事故？

それだったら大きい音がするはずだし、上空何百メートルからの落下なら、ここまで速く地上に迫りはしないだろう。

部員達もそれに気付いた様で、ボール探しを中断し、一時避難を始めている。どっちに行けば安全なのか、それ以前に避難の必要があるのかもわからないが、俺もそれに習う。

みんな自然と校舎に集まっていく。他の運動部や教師達もいる。

「高畑君、こっち」

「急げ」

みんなについて行つてた所を、雨宮さんと近藤に引き止められた。二人に引つ張られていったのは、グラウンドのフェンスの陰。校舎側からだ、死角になる部分だ。

「なんだよ、二人とも」

「あの光から高密度のエネルギーを感じるの」

「確証は無いが、お前の命を狙っている可能性がある」

「また、昨日のロボットみたいなやつか？」

「わからん。地下帝国にあんな形の兵器は無い」

「どうかしら？」

「そう言う雨宮こそどうなんだよ。天上界の刺客じゃないのか？」

「それは無いわ。天上界では、勇者様を迎え入れることで全会一致している。いまさら、騒ぎを起こして得する者もない」

「そうかい」

近藤が視線だけこつちに向ける。

「とにかくここにいてくれ。俺と雨宮とで、あの光を討ち落とす」

「他の人達に、あたし達が戦ってる所を見られるわけにはいかないから」

「わ、わかった」

としか答えようが無い自分が齒がゆい。

二人が同時に地を蹴る。その一蹴りで、二人の姿が目の前から消え失せた。

今まで断続的に近付いてくるだけだった光の動きが、鈍くなった。まるで蛇行するかのように、右へ左へとよれている。

一度のジャンプで、あの光の高さまで跳び上がったのだろうか……何十メートル上空かは知らないが。

光の揺らぎは、徐々に大きくなって行く。

戦って(?) いるのか。

揺らぎながらも、光はこちらへと接近する速度を弛める気配は無い。い。

むしろ、二人に刺激されたのか、スピードを増しているようにも見える。それだけ近付いてるといふ事か？

その光から小さな光が一つはじき出される。それはフェンスが歪むほどの力で飛んできて、そのまま地面におっこちた。

「近藤！」

全身、あざだらけ。

「高畑、逃げ……いや、あんなモンからどうやって逃げればいいのか……」

いつもの近藤からは予想できない、弱気な発言。

どんな戦いが繰り広げられていたのかは知る術もないが、強敵である事だけは認識出来た。

「あ、雨宮さんは？」

落ちてきたのは近藤だけ。雨宮さんはまだ戦ってるのか、それと

も……

「まだ上にいる。どれだけ持つかわからないがな」

よかった、まだ無事なのか。今はまだ。

その間にも光の大きさは増すばかり。相変わらず音も無く、熱も何にない。

その中に小さな人の形の影が一つ。あれが雨宮さんか。

手には例の光の剣を持っているのだろうが、より強い光の中に入るせいで全く見えない。

雨宮さんの影が、両手を振り上げ、振り下す。

その動作に呼応して、光は二つに分裂した。切断したんだ。

「まさか。あれを倒せたのか」

近藤が感嘆の声を上げる。

分かれた光の間から現れた雨宮さんの体が、宙に投げ出され崩れた。戦いで力尽きたのか、重力に引かれるままの自由落下だ。

あのままじゃ地面に叩きつけられる。

落下予想地点はグラウンド向うの幅跳び用の砂場の手前。そこに急ぐ。

「天上界人なら、あの程度から落ちたくらいじゃ大した怪我は負わないぜ」と言う近藤の声が聞こえたが、無視。直接戦う事が出来ないなら、せめてその後のサポートやフォロー位したい。

予想通り、待ち受けていた場所に雨宮さんが落ちてきた。

右腕で背中、左腕で脚を受け止め、ひざを曲げて衝撃を地面に逃がしてやる。

雨宮さんは俺の腕の中で目を閉じたまま。腕も力無くだらりと垂らし、指一本動く気配が無い。出血は無いが、近藤同様体中あざだらけだ。

「雨宮さん！ 雨宮さん！」

呼び掛けると、ほんの僅かにだがまつげが動いた。

「た、……く」

「あ、雨宮さん……わかる？」

よかった。とりあえず、意識はあるようだ。

「高畑くん……勇者さま……ひかり……、が、」

「光？ 大丈夫、雨宮さんが二つに斬って……」

「いや、待て。まだ消えていない！」

近藤が叫ぶ。

頭上には二つに分かれた光が、さっきのままの形で停滞している。何者なんだ、この光は？

「わからん。わかってるのは、地下帝国の物でも、天上界の物でもないと言う事だけだ」

「それと、もう一つ……高畑君を、狙って……いる」

雨宮さんが体を起こし、俺の腕から降りる。

「雨宮さん、まだ動かない方が……」

「平気。あなたを護るのが、あたしの使命」

再び、光の剣を右手に携える。しかし、以前目にした物に比べて、明らかに弱々しい。

「高畑、お前は無事に地下帝国に連れて行く」

近藤が向かって左の光に飛びかかる。

「天上界によ！」

雨宮さんは右に剣を突きつけた。

もうボロボロじゃないか。

雨宮さんの動きは、昨日のロボットとの戦いの時の動きより明らかに鈍い。

近藤の身のこなしからは、さっきの野球の試合の動きは見る影も無い。

なんで戦うんだ？

なんで、そんなになつてまで戦えるんだ？

『あなたを護るのが、あたしの使命』

俺が勇者の子孫だから？

『お前は無事に地下帝国に連れて行く』

俺が魔王の生まれ変わりだから？

それがなんだって言うんだ。実際にそうだって言う確証は何も無いじゃないか。

飯にそうだったとして、今の俺には何の力も無い。今の俺に護られる価値なんかない。

勇者？

悪い竜と戦って、天上界を救った？

なら護る方の立場だろ。

魔王？

その力で地下帝国から争いを無くした？

なら戦うべきは俺だろ。

そうなんだよ。

俺こそが戦うべきなんだ。

勇者でも魔王でもなんでも良い。俺に力があると云うなら、目覚める時は今だろ！

目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！
 目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚め
 るよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚め
 るよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！
 !　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！　目覚めろよ！
 目覚める氣が無いなら、無理やりにでも叩き起こしてやる！

「た……高畑？」

「危険よ。来ないで！」

二人の静止の声に耳を貸す必要は無い。

俺は向かって右、雨宮さんが戦ってる方の光に飛びかかった。

数メートルの距離からでさえ何の熱も感じなかったのに、光に触れたとたん、火にかけたままのフライパンを押し付けたような物凄い熱が俺の全身を襲う。

衣服も熱に焼かれ、チリチリになって霧散していく。

熱い。

光から受ける以上の熱を、自分の体の中から生まれてくるのを感じる。

熱い。

右腕が光っている。

この光に包まれた中にいて、なお、光と認識できるほどの光。その光を放っているのは、あの黒いあざだ。

雨宮さんも近藤も知らない、関係ないと言っていたが。この現象、まるで眠っていた力が解放される様を見ているようだ。

そうだよ。やっぱり、関係あったんだ。

勇者の方が、魔王の方がは知らないが、このあざは力が封印されていた証。この光がその証明だ。

赤に満たされた光の中に、右腕が放つ白い光が侵食していく。

目の前が、目に映る全てが照らされ、白く、白く、白く、白くなって行く。次の瞬間。

黒。

第三章

「高畑君。はい、お弁当。いっぱい食べて、午後の授業と部活頑張ろう」

「いつも思っただが、雨宮の弁当は脂が多い。この野菜ジュースも飲んでおけ」

「栄養接種ならサプリメントで十分だ。食事など、消化器官活動時に運動能力も落ちるし、非効率だ」

雨宮美奈子、近藤晶、三谷まどかが、三者三様に昼食を勧めてくる。もはや昼の恒例行事だ。

俺としては、雨宮さんと二人でゆっくり食事をしたところなのだが。

四人の話題は、自然、昨日の出来事の事になる。

あの時、光に飛び込んだ俺は、その中で意識を失った。そして、再び目を覚ました時、光は消え、それに代わる新たな厄介事が目の前に立ちはだかっていた。

話は、今から十二時間前の事になる。

「高畑君……あたしが、わかる？」

「雨宮さん……？」

目を覚ました時、俺はグラウンド横のベンチで、雨宮さんのふとももを枕にして横になっていた。

「わ、ごめんっ……ッッ！」

「だめだよ。急に起きたら」

目の前が暗転して、頭の中が揺さぶられた。立ち暗みだ。なれない膝枕に驚いて、慌てて起き上がってしまったが、もう少し堪能してても良かったかもしれない。

「目、覚めたか。高畑」

「近藤……」

もいたのか。その顔に、さっきまであったあざが消えている。見れば雨宮さんの腕や足からも、あざが無くなっている。

あの赤い光の来襲は幻だったのか？

「ううん、現実よ。高密度のエネルギーの集合体。結局、正体は不明のままだけど」

「あの光は、どうなったんだ？」

「覚えてないのか？」

「高畑君が倒した……事になるのかな？」

二人の話を総合するところだ。

俺が光に飛び込んですぐ、俺が入り込んだ方の光、次いで近藤が格闘していた光が、順に氷が溶けるように消滅した。

そこに俺が倒れていたと。

なお、あのあざの変化は二人とも見えなかったらしい。

あれは勇者の力だ、魔王の力だと、雨宮さんと近藤は相変わらずの押し問答を繰り返している。この様子を見るに、危機は去ったらしい。

グラウンドをぐるりと見渡すと、さっきまでいた野球部員や他の運動部、顧問の先生らの人影が一切ない。みんな校舎側に避難していたかと思うが、そっちにも人の気配は無かった。

あたりも大分暗くなってる。どれくらい気を失っていたんだろうか。

校舎の時計を見ようにも、この暗さじゃ文字盤の数字すら読み取れない。

近藤が腕の時計をこちらに向けてよこしてくれた。

表示は、十二時十五分。

「じゅうにじ……？ 十二時！」

こんなところで六時間近くも眠っていた事になる。

いや、そんな事より、下り電車の最終時刻は確か十二時三十八分だったか。走ってギリギリの時間だ。

「なんだったら、今夜は家に泊まれば……」

と、雨宮さんから物凄く魅力的な申し出を受けたが、絶対明日面倒な事になると思うので、丁重にお断りした。

かばんとスポーツバッグを肩にかけると、一歩目からスパートをかけて、駅への道をダッシュする。

踏み切り前の道を通り過ぎる時、カンカンカンと言う音とともに遮断機があり、電車が横切っていく。上り線だ。上りの路線は下りより十一分早い。駅の建物も視界にとらえているし、ここからなら歩いても間に合いそうだ。

少しスピードを緩め、軽く息を整える。

「やつと一人になったな。エナジーを返してもらっ」

そろそろ定期を用意しておくか。

「あの力は地球人類の技術力では、まだ到底扱えぬもの」

スポーツバッグのポケットに財布と一緒に押し込んであるはずだ。

「素直に返すなら良し。返さないというなら、広域宇宙法三十一条に乗っ取り……」

あつた。これが無かったら、家に帰れないところだった。

「無視するな！」

顔の横で、電柱が一本消滅した。それにより電線が千切れ、周囲で停電が起こる。

「お前だ、お前。その地球人！ スーパー宇宙エナジーを今すぐ返せ」

目の前に、コスプレ少女……としか形容しようの無い人物が立っていた。

頭の両サイドでくくられた、天パ気味の短いツインテール。体にぴったりフィットした、エナメル質の黄色い上着とショートパンツ。左手首には、七色に点滅するブレスレット。右足首にも同じデザイン

ンのアングルレットをつけている。

三六〇度、どこから見てもコスプレだ。深夜の町中で。

時間も無いし無視を決め込みたかったのだが、呼ばれた以上は立ち止まらないわけにはいかない。その一番の理由は、彼女が右手に持つてる光線銃らしき物の存在のせいなのだが。さっきの電柱は、十中八九、そのせいだ。

「……返せって何を？」

「スーパー宇宙エナジーだ。何度も言わせるな。早く返せ」

とりつくしまもない。だいたい、スーパー宇宙エナジーってなんだよ。

「惚けるな。さっき、お前がネコババした光の事だ。自分から光の中に入り込みまでしたじゃないか」

「さっきの光の事を言ってるのか？」

「そうだ。早く出せ」

「そう捲くし立てられてもな。あんな物、俺のどこに持つてるって言うんだよ？」

「方法など知らん。だが、お前が最至近距離にいる時にスーパー宇宙エナジーの反応が消えた。なら、お前が持つている可能性が一番高い。だから来た」

状況証拠だけかよ。冤罪で誤認逮捕される時も、こんな気分なのだろうか。

俺達の横を、六両編成の電車が通り過ぎていく。終電、乗れなかった。家に帰るのは諦めて部室にでも泊まろう。

時間はある。目の前のコスプレ少女の話をマジに聞いてやってもいいだろう。雨宮さんも近藤も正体がわからないと言っていた光を名指ししているのだ。きつと彼女も、どこから来たナントカ人だと思うから。

「あたしは広域宇宙警備機構に所属する広域宇宙知的文明保護調査員だ。社の規約と広域宇宙法九百九十一条に抵触する為、あたしの本名並びに出身星を明かすわけにはいかない事を、先に断っておく」

本名は言えないか。あ、今更だけど、雨宮さんも近藤も本名じゃないんだろうな。

「あたしはある任務を受けこの地球を含む恒星系の調査をしていた。多少時間はかかったけど、大したトラブルもなく、それは終わった。……そこまでは良かった。問題は、調査を終えた帰り道。ワープ航法を開始するために、ウルトラ宇宙エンジンの出力を八十五パーセントにまで上昇させる必要があるのだが、どう言うわけか四十パーセントから数値が動かなかった。気になってリペアユニットを起動させてみたら、なんと動力炉に大きな穴がついてるじゃないか。ハイパー宇宙タン製の壁面にだ。そこからスーパー宇宙エナジーが漏れ出してる。それが無くなったら宇宙船は当然動かない。大急ぎで修復はしたんだけど、もう手遅れ。ワープ航法出来るだけのスーパー宇宙エナジーは残っていなかった。回収するために追っかけて来たら、そこにお前達がいた」

「えーと……」

何度か出てきたナントカ宇宙ナントカと言うのが気になって、あまり頭に入らなかつたけど、要約すると、

「宇宙船の燃料を落とした、と」

「身も蓋も無い言い方をすれば、そうなる。お前じゃないとしても、お前といた二人のどつちかが持つてるはずだ」

どうだろう。いろいろ人間離れた、人間じゃない二人だが、そう言う目で見るのは良い気がしない。

「だったら、俺一人になるのを待たないで、さっき三人いる時に出て来た方が話が早かつたんじゃないのか」

「あの二人は、他の地球人とは異質な感じがした。だから、出来れば接触は避けたかった」

鋭い。さすが、宇宙人（でいいんだよね？）だ。

「だが、そうも言ってられないな。これから、他の二人がスーパー宇宙エナジーを所持していないか確認に行く。……言うておくが、お前の容疑が晴れたわけではないからな」

そう言い残し、彼女は闇に消えていった。

この後、雨宮さんと近藤の前にも姿を現したと、今朝聞かされた。同時に、二人ともスパー宇宙エナジーなる物に心当たりが無いとも。

かくして、家に帰れなくなった宇宙人は、そのために必要な宇宙船の燃料を手にするその日まで、地球に足止めを食らう事になった。疑わしきは三人の少年少女。そのうちの一人が、隠し持っているはずだ。そう確信した彼女は、彼らを最も間近で監視できる場に、その身を投じる事にした。

すなわち、ねこちぐら高校一年一組に在籍する事に。

教師も生徒も、今日初めて会うはずの三谷まどかと名乗る少女を疑うでもなく、四月の入学式の日から、このクラスにいたように接している。

コスミック集団催眠ウェーブを使ったと言っていたが、まあいいや。

で、

「あたしは高畑が一番怪しいと睨んでいる。普通の生物なら、スパー宇宙エナジーに触れたら、そのエネルギーで蒸発してもおかしくない。中に入ってまで無傷なんだ、お前もまともな人間じゃないんだろう」

「当然。勇者様の血を引くお方だもの。外宇宙のエネルギーの塊くらい、なんでもないわ」

「魔王様の魂が強靱だからだ。肉体がどれだけ丈夫だろうと、精神が耐えようとしなければ、その力は発揮できまい」

……この会話、第三者にはどう聞こえるんだろう。

それは唐突にやってきた。

本当に唐突すぎて、どこから説明すればいいのやら。

まずは深呼吸。目の前の状況を整理しよう。

巨大怪獣が街で暴れてる。そうとしか言いようがない光景が、目の前で繰り広げられている。

見た目はザリガニそのもの。甲羅が深い緑色だったり、鋏を二対四本持っていたり、体長が五十メートル以上ある事を除けば、だが、それが、暴れてる。

目的は不明だが、鋏を振り上げる度に、体を揺らす度に、一步前に進む度に、家屋が、店舗が、ビルが、橋が、道路が、その名を瓦礫と変える。

町は戦々恐々とし、人が右に左に逃げ惑っている。この地域は、うちの学校が避難場所となっているため、黄土色のグラウンドは、もはや人でごった返している。校内放送でも避難を呼び掛けているが、パニック状態で、避難訓練など何の役にも立たないと言う事を実感させてくれる。

人目を盗んで、抜け出すのは簡単だった。

「答える。今度のアレは何だ？」

「わからないわ」「知らん」

雨宮さんと近藤は即答した。

もう一人は、回答保留状態だが。

「……知らない」

目が泳いでいる。

「そうか、なら手短に教えろ」

「あたしが悪いんじゃないもん。お前達が、早くエナジーを返さないからさあ」

「まどかさん。早く教えて！」

「このままじゃ、地上がメチャクチャになるぞ！」

二人の意見が珍しく合った。……この状況で合わなかったら、少し精神を疑うが。

「あれは……グレート宇宙クリーチャーよ……この恒星系で進化したね」

グレート宇宙クリーチャー。その名前だけで、どんな物かだいた想像出来るが。

「あたしがこの恒星系を調査していたというのはすでに言ったよね。基本的には、第三惑星……地球……の生物の生態系の調査だったんだけど、それ以外の惑星や小惑星、衛星まで含めた広範囲の調査をしていた。案の定、地球以外の天体はバクテリア程度の微生物くらいしか見つからなかったけどね。でも一つだけ例外があった。第十惑星の十七の衛星の一つに生物進化の常識を超えた生物が生息していた。それが、グレート宇宙クリーチャー。突然変異なのか宇宙線や放射線の影響なのか、それすらもあたし達の調査でさえ判明していないそれは、強靱な体組織とあらゆる環境で生きられる順応力、無限とも言える寿命を持っている。その秘密を解き明かす事が出来れば、人類……いや宇宙に生きる全ての生命が、健やかに過ごせる理想世界を築き上げる事が出来る。グレート宇宙クリーチャーの捕獲に成功したあたしは、母星に帰る途中で、スーパー宇宙エナジーが動力炉から漏れ出しているのに気付き、地球に緊急不時着した……そう、宇宙船の動力はすべて、スーパー宇宙エナジーに委ねられていたのよ」

外では相変わらず、巨大怪獣が暴れまくっている。自衛隊や日米軍が出動してくる気配がないのは、責任問題のためか、それともゴルフでもしているせいかな。

「ちゃんと檻に入れておいたんだけど、スーパー宇宙エナジーが足りなくて、鍵が甘くなつてたみたいね」

「つまり、逃がした、と」

「ぶっちゃけ」

ぶっちゃけるな。

「なんにしても、あれを止めないと」

「一度捕まえてるんだろ？ その方法で、すぐ捕まえられるのか」

「無理よ、あの時はエネルギー百パーセントあつたし、重力だって地球の一ノ八〇だつたし」

「武器は持つてないの？」

「そうだ、昨夜の光線銃は」

「無理。グレート宇宙クリーチャーの外皮の強度は、エクセレント宇宙ビームくらいじゃ、火傷すら追わないわ」

「雨宮の剣で斬れないか？」

「難しいわね、大きすぎる。心臓や脳がどこにあるかもわからないし。近藤こそ、飲み込まれて内部から攻撃する気ない？」

「無いな。内部の組織が殴つて破けるという保証も無い」
「打つ手なし、なのか？」

「だれが持つてるのか知らないけど、早くスーパー宇宙エナジー返しなさいよ。それさえあれば、宇宙船を動かせるから、手間取るだらうけど捕獲できるわ」

「だって、近藤」

「そうだな。早く返してやれ、雨宮」

「いい加減にしてくれ！」

その瞬間、あざが熱を帯び、白い光を放った。

「高畑君、その光は……？」

「それが、あの光の中で起こつたと言う……」
「うなずいて答える。」

昨日と同じ現象だ。昨日、これが起きた直後……結局何が起きたのかはわからないが……事態は解決した。きっと、今回も。

信じられないのか、二人とも目をパチクリしている。それと対象的に、目を見開いて、俺を睨みつけているのが一人。

「この反応……高畑、やっぱりお前が持っていたのか！」

三谷が俺の顔と腕時計（の形をした何かの機械）を交互に見比べて言う。

「おまえの体内から、強い反応が出ている」

「あたしも感じるわ。高畑君の体から、ものすごい力の流れを……でも、天上界の物とは異質。勇者様の血が目覚めたからじゃなさそうね」

「残念ながら、地下帝国でも、こんな力は感じた事が無い」

「そうよ。それこそがスーパ―宇宙エナジー……広域宇宙で最も純粹で最も危険な力……通常、生命体の内部に入り込む事なんてないはずなのに」

勇者の血か魔王の魂のせいだろうか？

「今すぐ、それを返せ。グレート宇宙クリーチャーを捕獲しに行く。お前達の望みもそれのはずだろ」

「そつだが、どうやるんだ？」

「前例が無いからわからん。とにかく宇宙船までついて来い。場合によっては、お前の体ごと動力炉に放り込む」

「そんな事されてたまるか」

抗議と共に、腕を軽く横になぎ払った。

それによって風が生まれ、俺を中心に四方に広がる。雨宮さんの長い髪は乱れ、三谷の短いスカートは捲れ上がり、近藤の巨体すら後ろに二、三步よろめいた。のみならず、廊下の窓は片っ端から割れ、窓枠から外れ、壁の一部にヒビが入り崩れ落ちる。

「な、なに今の？」

「高畑、今、何をした？」

雨宮さんの疑問にも、近藤の質問にも、答えられず、首を横に降るしかできない。

いや、俺の中では何となく答えがわかっていた。

右腕から発生した熱は、肩から胸、そして全身へと伝わっていく。しかし、不快感は感じない。試合中の高揚感に近い、心地よい熱さだ。全身の筋肉、血管、神経……その全てが自分の意思のままに動き、望むままの形に変化する。あの感覚だ。

これは、俺の体内に入り込んだ、スーパ―宇宙エナジーがもたら

した物だろう。

ただ腕を振っただけでこの威力。なら、本気の力で殴りかかったら？

ガラスを失った窓の向うでは、グレート宇宙クリーチャーが瓦礫の荒野と化した町を縦横無尽に歩き回っている。この町にガスタンクや発電所などの施設が無かったのは不幸中の幸いと言っべきか。

「俺が、あいつを止める」

「高畑君、何言ってるの？」

「この力！」

壁に触れる。それだけで、人が通り抜けられるだけの、風穴があった。

「この力なら、あいつの体にだって傷をつける事が出来る」

「無理よ。どんなに力があっても、あの巨体に近づくのは困難よ。」

「ここは三谷さんに力を返して、後の事は彼女に任せた方が」

「俺って、天上界を救った勇者の子孫なんだよな？」

「え……そうよ」

「今の俺は、この世界に生まれて、この世界で育った、この世界の人間なんだ。なら、この世界を救って、この世界の勇者にならなきゃ」

返事を待たずに、俺は外に飛び出していた。

いつも利用している駅。

学校帰りに立ち読みしているコンビニ。

部活終わりにみんなで食いに行く、牛丼屋。

無くなっていた。

焼け出された人々が、そこらじゅうでなす術も無く立ちつくしている。皆、着のみのまま、飛び出してきたのだろう。

そして、瓦礫の下にだって、残された人がいるはずだ。

町はすでに壊滅状態。

だが、あの人達が残っていれば、いつかは元通りになるはずだ。

あの人達には、手出しさせない……

地を蹴る。

人蹴りで、百メートル以上の距離をジャンプできた。

周囲の景色は、もはやただの線でしかない。逆に、俺が横切ったところで、そこにいた人には、突風が吹いたようにしか感じないだろう。

ただの走りでこれだ。

勝てる。

倒せる。

護れる。

五十メートル長のザリガニの背中に飛び降りる。この巨体なら、完全な死角だ。

ためしに、足元の甲羅を思いっきり殴りつけた。

拳を中心に凹み、放射状にヒビが走る。

怪獣は鉄を振り回すのをやめようとはしない。

何度もそこらじゅうを殴りつけても、反応は同じ。いや、そもそも反応が無い。

人間が三、四センチの小動物に噛まれたところで、かゆみを覚える程度の物。ましてや皮膚ではなく甲羅では、神経など通ってはいないだろう。

「だめなのか？ この程度の手じゃ」

『グレート宇宙クリーチャーの外皮の強度は、エクセレント宇宙ビルムくらいじゃ、火傷すら負わないわ』

『難しいわね、大きすぎる。心臓や脳がどこにあるかもわからないし』

『無いな。内部の組織が殴って破けるといふ保証も無い』

……三人ともそうだと言ってたじゃないか。

俺は馬鹿か。

戦い馴れてる三人が、早々に倒せないという結論を出しているんだぞ。

俺は馬鹿だ。

ついさっき手にした程度の力で、何が出来ると言うんだ。

分不相応な力を手にして、いい気になってただけじゃないか。

「俺に、倒せるわけが無いだろ！」

「そんな事もないんじゃない？ グレート宇宙クリーチャーが外皮に傷をつけられた所なんて、初めて見たわ」

「伝説に聞く邪皇竜は、一晩で天上界の一ノ三を焼き尽くしたと聞いているわ。こんなエビさんなど、サクラエビにも劣る小物よ」

「地下帝国には千に迫るグループがあった。魔王様は、それらを一つに束ねるまで泣き事なんか言わなかったはずだぜ」

三谷、雨宮さん、近藤……

俺が増長し、勝手に突っ走ってただけなのに。

「ここまで来たら、宇宙船に戻るのもめんどくさい。こいつはここで倒すよ」

グレート宇宙クリーチャーの生態を知るのは三谷一人だ。彼女が作戦の指揮をとる。

「高畑は体内に取り込んだスーパー宇宙エネルギーの影響で、相対的に能力が上がっている。その力で外皮を傷つける事も出来た。しかし闇雲に叩くだけじゃ、倒せるのはいつになるかわからない。だから……急所を叩く」

「場所がわかるのか？」

「とーぜん、専門家よ、あたしゃあ」

どーんと胸を張ってるが、そもそも、その専門家が逃がしたんじゃないかと。いまさら、何も言う気は無いが。

「叩くなら、急所中の急所。心臓。首の後ろの外皮さえはぎとれば、姿を現す筈よ」

と、ザリガニの頭部を指さす。

ちなみに、今は尻尾の中ほどに立っている。動き回ってるのに係

らず、ほとんど揺れもしない。これも、巨体ゆえか。

一方、頭の方はそうは行かない。目線に合わせて左右するし、間接が近いのか鉄を動かす度に上下する。それに、シャッター扉のように殻が層になっていいるため、下手したらあれに挟まれただけでオダブツだ。

「そう、急所だけあって、護りが固い。人間の脳が頭蓋骨の中にあつたり、心臓が肋骨に覆われているような物。でも、言い換えれば、それだけ護らねばならないくらい重要な部分だと言う事」

「作戦はわかったが、素直に殴らせてくれるか？」

「もちろん、尻尾と違って、心臓近くに外敵が来たら、こいつだって排除しようとするわ。だから、誰かが気を逸らす役をする必要があるわね」

話し合いの末、雨宮さんがオトリ役を引き受ける事になった。オトリが複数いると、ザリガニが興奮して動き回り、攻撃し難くなると言うのがその理由だ。それに四人の中で唯一、雨宮さんだけが飛べる。左右だけじゃなく、上下にも逃げられる。

すでに雨宮さんはザリガニの鼻先を右に左に飛んで、ザリガニの気を引き付けている。向うは鉄で叩き落とそうとしているようだが、的が小さくて巧く狙えずにいるようだ。

「みんな、俺達も始めよう！」

「ああ」

「おーけーい」

俺達の仕事は至極シンプルだ。

ザリガニの外皮を殴りまくって、はがす。美学も何も必要ない力押しだ。雨宮さんがザリガニが頭をあまり動かさずに追って来れるように誘導してくれているおかげで、こっちは攻撃に集中できる。

いつの間にか、俺が殴ってヒビを入れ、三谷が銃で穴を広げ、近藤がそこに手を入れ引っ剥がす、という分担作業になっていた。

それを二十分は続けていたか。直径三十センチほどの穴が、十個

以上並んでいる。

「そろそろ仕上げね。この穴同士をつないで、外皮を一気に剥がしちゃいましょう」

穴と穴の間を殴り、全てを繋ぐ。

近藤が、それを確認し、外皮を持ち上げる。さすがに、サイズが違う。俺も、隣に立って、それを手伝う。

向う側では、三谷が銃を構えている。心臓が露出したら、一気に撃ち抜くつもりだ。

ベキベキ、メリメリメリ……

ヒビの上に更なるヒビが入り、細かい粉を散らせて、固い殻が持ち上がったくる。

「あと、一息っ」

脚に力を入れ直し、一気に腕を上げる。

ボタン。

持ち上がった殻は、自らの固さに支えられ、車のボンネットやピアノの蓋のように、斜めのまま止まっている。

「よっし、二人とも退いて。とどめよー！」

光線銃から放たれたブームが、外皮にあいた大きな穴にまっすぐ向かう。バシユンと大きな音を立てて爆ぜ、そこから一筋の煙が上る。

「あれ？」

「どしたあ？」

「エクセレント宇宙ビームは対象を破壊した場合、煙なんか上がらないのよ。完全に消滅させちゃうから」

「どう言う事だ」

「心臓が外皮並に硬かったって事か？」

「それは無いわよ。そこまで頑丈なら、体内に内包する必要が無い」

「じゃあ、場所が間違っていたのか」

「かも知れない。グレート宇宙クリーチャーは、通常の進化からは外れた存在だから、あたしの知識を超えてたとしても不思議は……」

煙が晴れた。

心臓の位置が違っていたのであれば、そこにあるのはそれ以外の臓器か、もしくは筋繊維。さもないければ……

「殻……？」

現れたのは、電柱を一発で消滅できるだけの光線銃を受けても、焦げ痕一つついていない、白い殻だった。

「そんな……こんな事って……」

三谷が脚を震わせ、ぺたんと座り込む。

いや無理もない。この巨大怪獣が見た目通り、ザリガニに近い生態をしているのであれば、この白い殻から導き出される答えは一つ。同じ思考に至ったのか、近藤も渋い顔をしている。

その最悪の予感に答えるように、ザリガニが身震いを始めた。背中に乗っていた俺達は降り落とされる。三人とも、巧く着地は出来たが。

異変に気づいた雨宮さんもオトリ役をやめ、こっちに降りてきた。

「何？ 怪獣の様子がおかしいんだけど……倒したの？」

「だったらいいんだけど……」

さっきの身震いで俺達が空けた穴を中心に、体中にヒビが走りめぐっていく。

これはもう、間違いない……

「脱皮」

やつは、これから更に成長する。

現段階で、まったく歯がたたなかったというのに。

古い皮を脱いだザリガニは、まだ生まれ変わったばかりのように、真珠のような真っ白い殻を着ていた。形状はほとんど変わっていない。だが、問題はその大きさ。脱皮前は五十メートルほどだったその体長は、八十を超えるまでに伸びている。鋏も、それに合わせて肥大化している。

「……心臓の位置は同じなのか？」

近藤が三谷に尋ねるが、何も答えない。

「殻が白いうちなら、まだ柔らかいはずよね。それに脱皮したばかりで動きの鈍い今なら、オトリなしでも……」

「うるさい！」

雨宮さんの提案すら、一蹴する。

「スーパー宇宙エネルギーを返せ！ 宇宙船の装備なら、あいつを倒せる！」

「またそれかよ。あの力を分離する方法がわからないって、何度も……」

「だったら、お前ごと動力炉に放り込む！ それで宇宙船が動く！」
ぱちんっ。

乾いた音が一つ。

「いい加減にして。今更そんな事言っても始まらないでしょう」
雨宮さんが三谷の頬をはたいた音だ。

「あの怪獣を地球に連れて来たのは誰？ エナジーを漏らして地球に落としたのはだれ？ 施設が弱まった檻をそのままにしていたのは誰？ あたし達は、それに目をつぶって戦ってるんじゃないの？」

「雨宮、やめとけ。結局、そいつにとっては地球も高畑も、自分とは無関係の別世界の事。この騒ぎだって対岸の火事どころか、火の粉すら降りかからない場所の焚き火に過ぎない」

近藤が、三谷を責める雨宮さんを止める。

「近藤はこいつの肩を持つつもり？」

「何言っても無駄だって言ってるんだ。今はあれを倒すのが先だ」

「……そうね」

二人は皮を脱いだばかりで動きの鈍いザリガニに向かって行った。さつきは白かった殻の色が、今は薄く青みがかった。色素が増す度に高度を増しているのであれば、叩くのは今しかない。

俺はと言えば、

「三谷……エナジーの分離の仕方がわからない。今だけ貸しておいてくれ」

こつ言つのが精いっぱい。もう少し気のいいセリフは思い浮かば

ないのかと、我ながら情けなくなる。こんなセリフじゃ当然と言うべきか、三谷からは何も返事は無かった。

まだ右手のあざが熱く光っている。

二人を追って、俺もザリガニに向かった。

急所とわかっている首の後ろを中心的に攻めているが、効果なし。殻が、まだ固まりきっていないため、打撃が全て柔らかい外皮に吸収され、散らされてしまうからだ。まさに、のれんに腕押し、ぬかに釘。

これを繰り返したところで、本当に倒せるのか。つい、そんな弱気を抱いてしまう。

「くそ。いくら殴っても、小さく凹むだけだ」

「斬っても奥まで貫いた感触が無い。この外皮、何十センチあるのよ？」

巨大なザリガニに対して、戦いを挑んでる俺達の姿は、まるでハエかノミのようだ。

サイズが違いすぎる。

敵と同じ大きさなら。

そうだ、ただデカイだけのザリガニ。同じスケールの戦いなら、難無く倒せる相手のはずだ。

「高畑君……それ……」

「え？」

雨宮さんが指差したのは、俺の右腕、そこにある例のあざだ。やつとの戦いがはじまってから、ずっと白く光っていた。だから今更と思ったのだが、

「銀色に光ってる」

近藤も攻撃の手を休める。

光の白と銀にどう違いがあるのかはわからないが、今までと光り

方が違う気がする。

「力が、また強くなってるわ」

俺にはそう言うのはまったく感じ取れないのだが、雨宮さんが言うからにはそうなんだろう。

「これは、スーパ―宇宙エナジーから感じられた力と、何か違う」

「だが、魔王様の力じゃないな」

「勇者様のモノとも違う」

ちよつと待った。その三つ以外に、何があるって言うんだ？

「わからないわ。元来、その三種は交わる事が無い、異世界同士の力。それが高畑君の体で一つに混じりあつた事で、別種の新しい力に生まれ変わったのかもしれない」

「さっきまでの、高畑の戦いもその片鱗かもしれないな。ただ外から力を吸収したから強くなったんじゃない。それを自分に合うように作り変えたのかも知れん」

二人の話はいつもついていけない。

でも、その説が正しいのであれば、この力は俺のために、俺の意思で働いてくれるという事か？

「光が、また！」

あざの光が強くなった。

俺の問いに答えるように。

右腕から放たれた光が、俺の体を包み込んでいく。首を超え上つて来、視界が光で満たされる。

それが消えた時、俺はザリガニを見下ろしていた。だが足は地に着いたままだ。

眼下には廃墟と化した家々が並んでいる。学校の校庭や公園などには、避難を済ませた人達が黒い塊をつくっている。

あの人達を守る力。今の俺にはある！

今まではどんなに殴られようと存在すら無視されていたが、自分を見下ろすような相手となれば別だろう。ザリガニが俺を見上げ、

鉄を振りかざしてくる。

それを左手で受け、勢いそのままに引つ張り上げる。それだけで、巨大鉄が肩の付け根からひっこ抜けた。

脱皮したばかりで体が柔らかいせいかな、それとも俺の力が物凄いのか。どちらであろうと、やるべき事は決まっている。

拳を握り、力いっぱい降り落とす。

狙いは首の後ろの外皮。その下にある、心臓。

巨体が崩れ落ち、町が大きく揺れた。

エピローグ

廃墟だらけの瓦礫の町に俺は立っていた。

いつの間にか目線の高さは元に戻っている。

こうなつては町のどこにいいのかわからないが、さっきいた場所からかなり離れてしまったようだ。

「高畑ー！」

……誰かに呼ばれたか？

「高畑！」

やっぱり、誰かが呼んでいる。

声のする先を見やると、瓦礫を踏み超え、走ってくる影が一つ。

「……巽？」

あの長いポニーテールは間違いない。巽心愛だ。

隣の席なんだから毎日顔を合わせてるんだが、何故かすごい久しぶりにあつた気がする。

だが、なんか服装が妙だ。

白い着物に緋色の袴、典型的な巫女装束。確か、家が神社だと言っていたが……何故、今着てる？

「高畑、ついに尻尾を出したわね。その正体、はつきりこの目で見たわ！」

手に持つ錫杖をこちらに向け、巽が叫ぶ。

「な、なんだよ正体って？」

「惚けたって無駄よ。さっきなつてたじゃないの。妖怪・見越し入道に！ その腕の呪印がその証」

俺はがっくりと肩を落とした。

「巽、お前もか……」

「お前もって何がよ？」

「なんでもない、続けてくれ」

「あれは三百年前、うちの先祖が社に封印した、このあたりを荒ら

していた妖怪。それが、十年前に封印が解かれて逃げ出した。分家の手も借りて方々を探し回ったけど、結局行方知れずのままだった。それが入学式の日、偶然にもあたしの目の前に現れた。あんたよ。不本意だけどあんたにぶつかった時、体内に妖気が流れているのを感じた。その時にはすでに確信していた、あんたが妖怪をその体に宿していると。それでも、あんたはただの人間。もし悪さをする事が無いのなら、そのままにしておいてもいいんじゃないかと、しばらく観察しておく事にした。それなのに、それなのに、それなのに、あんたのせいで、この町がボロボロのグチャグチャじゃないの！」「それはザリガニがやった事だ！」「それだつてあんたの仲間なんでしょ！ 巽神社直系のあたしの目は誤魔化されないわ！」

錫杖を構え直し、曇りまくった目で俺を睨みつけてくる。

「妖怪・見越し入道、即刻封印してくれる！」

高畑陽平。十五歳。野球部所属。

天上界の勇者の子孫。

地下帝国の魔王の生まれ変わり。

高純度のスーパ―宇宙エナジーを内包。

右腕に妖怪・見越し入道の呪印。

これが今の俺のプロフィールだ。

誰か、一個でいいから代わってくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119a/>

運命に選ばれすぎた男

2010年10月8日11時24分発行